

能登地域の観光振興に向けて

【要 旨】

1. 能登地域の現状と観光面での新たな動き

能登地域では少子高齢化や産業の衰退が進んでおり、地域の活力を今後いかに高めていくかが深刻な課題となっている。比較優位による内発型発展を目指す点で、能登地域では秀でた地域資源を活用でき、波及効果も大きい観光産業に対する期待が大きい。他方、現状の能登観光に関しては、「見る」から「体験する」観光へとニーズがシフトする中、観光客数の減少を余儀なくされている。特に、県外客の取り込みと通過地化している状況からの脱却が課題である。こうした中、能登空港が開港し（平成15年7月）、能登地域に観光振興面で大きなチャンスが到来している。

開港に前後して、地域の魅力を高めるための新たな動きも出てきている。例えば、輪島市ではまちを回遊して楽しめるように、まちなみ整備、輪島塗の交流施設整備、有名な朝市を補強する地物市の開催といった取り組みがなされている。珠洲市でも特産品のハーブを活かしたまちおこしが開始されている。能都町では、農家を改築した民宿に宿泊し農作業など田舎生活を体験してもらうグリーン・ツーリズムへの取り組みが行われている。また、能登地域のPRの面では、能登ブランド認定を行うNPOの立ち上げ、地酒を活用した首都圏との地域交流事業「地酒列車」といったイベントの開催等がある。関係自治体も能登便に対する全国初の搭乗率保証制度の創設、東京都心でのアンテナショップ開設、特区によるグリーン・ツーリズム推進など、様々な支援策を講じている。

2. 注目される「まちなか観光」・「体験滞在型観光」とそのポイント

これらを含め現在能登地域の各地で進められている取り組みの多くは途についたばかりであり、観光客を呼び込むには観光のパーソナル化を踏まえたなお一層の工夫が必要と考えられる。その際、最近の志向にマッチした次に挙げる二つのタイプの観光が参考になる。一つは、まちを思い思いに回遊し見る・食べる・買う・感じるといった行動を取りながらそのまちの雰囲気味わうという、いわゆる都市観光の一形態であり、これを「まちなか観光」と呼ぶことにする。もう一つは、都市生活者などが農山漁村への滞在・作業体験を通じ自然との対話・地域文化とのふれあい・人々との交流を楽しむグリーン・ツーリズムに代表されるタイプの観光であり、これを「体験滞在型観光」と呼ぶことにする。

まちなか観光への取り組みで成功している観光地については、①まちなみ景観や生活風景、食、工芸品や服飾品、文化芸能等の地域資源の複合により、まち全体として高質な観光資産になっている、②これにより、まちに固有の雰囲気がある、といった特徴を有している。具体的には次のような事例がある。

- ・ 武家屋敷・商人町と桜を活用したまちづくり（秋田県角館町）
- ・ 民話のふるさととしてのまちづくり（岩手県遠野市）

- ・蔵とラーメン店を活用したまちづくり（福島県喜多方市）
- ・地域ゆかりの葛飾北斎の美術館とまちなみ修景によるまちづくり（長野県小布施町）
- ・黒壁建物を核とする景観統一とガラス工芸によるまちづくり（滋賀県長浜市）
- ・自然や田園風景、特色あるイベント、温泉を活かしたまちづくり（大分県湯布院町）

体験滞在型観光への取り組みで成功している取り組みとしては、①地元関係者が意思疎通を行いしっかりした受入体制を構築している、②逆に、地元が過度の負担を負わないように工夫をこらし、持続性を高めている、③疑似でなく本物の田舎の暮らしを体験できる点で来訪者の満足度を高めている、といった特徴を有している。具体的には次のような事例がある。

- ・農業等を体験する修学旅行受入れ（秋田県田沢湖町・新潟県東頸城郡・長野県飯山市）
- ・滞在型市民農園「クラインガルテン」の開設（長野県四賀村）
- ・都市住民に農繁期に農家を手伝ってもらうワーキングホリデー（長野県飯田市）
- ・会員制農家民泊の実施（大分県安心院町）

これらのうち三つの事例を見てみよう。

岩手県遠野市のまちなか観光の取り組みでは、茅葺き屋根の「南部曲り家」や水車の保存、遠野らしい田舎の雰囲気の維持を図る一方で、地元高齢者の協力を得ながら、民話（昔話）をライブで披露する「とおの昔話村」、わら細工など地域ならではの作業が体験できる「遠野ふるさと村」といった交流型施設を運営し、まちの魅力を高めている。

長野県飯田市の体験滞在型観光の取り組みでは、市と農家や住民の連携により、体験プログラム数200・受入民家数400戸という充実した内容の体験教育旅行企画をつくりあげ都市の学校に修学旅行として売り込んでいるほか、農繁期を中心に都市住民にボランティアで農作業を手助けしてもらう「ワーキングホリデーいいだ」を進め、都市との交流を図っている。また、同県四賀村では遊休農地をクラインガルテン（滞在型市民農園）として都市住民に貸与し、準村民として有機栽培に取り組んでもらうという体験滞在型観光を進めている。両事例では参加者側が期待する農作業や田舎体験ができる点で人気を博している。

以上のようなまちなか観光・体験滞在型観光の各事例については、共通する成功要因として次の三つがある。

①地域づくりへの地域全体による取り組み

取り組みの体制の点で、行政・関連事業者・住民など地域全体でしっかりと連携が取れている。地域の魅力向上が地域住民自身の意識を高め、交流人口の増加が地域活力の創出につながるというコンセンサスが醸成されており、地域全体が高いモチベーションを有している。また、核となる主体や強い信念を持ったリーダーたちが取り組みを支えている。

②地域資源の観光資産化とその質の維持

地元にとっては見慣れた景観や当たり前品の品、日常の作業であっても、その中の本質的な魅力に気づき、これを活用して来訪者の期待に応えられるだけの観光資産を形作っている。また、様々な工夫でその水準を維持し、来訪者に満足感を与えている。

③効果的なプロモーション活動

需要を喚起するための地域情報の伝達の点で、マス広告に加えて、より直接的できめ細かなパーソナル対応を怠っていない。ウェブ情報の充実といった地道な方策に加え、eメール活用、ターゲットを定めたPR等直接的なプロモーションが行われている。

3. 能登地域の観光振興について

観光のパーソナル化の中にあっては、能登観光に関しても、和倉温泉や輪島といったコースに加え、まちなか観光・体験滞在型のようなタイプの観光を深化させ、幅をより一層拡げることが重要と考えられる。

前提として、まず活用可能性のある能登の資源の例を整理してみると、キリコ祭りや神事風習、民話・民謡、朝鮮交流や義経伝説といった歴史ゆかりの地、文人ゆかりの地、能登演劇堂などの芸術、総持寺・気多大社等の寺社、輪島塗・珠洲焼等の伝統工芸、まちなかや輪島千枚田など農漁村の風景、巖門・窓岩・千畳敷・九十九湾などの自然風景、農漁産品・加工食品など地元の食などが挙げられよう。まちなか観光や体験滞在型観光に関しては必ずしも第一級の観光資産を多数必要とするものではない。来訪者がそれぞれの関心事において「能登らしさを満喫できた」、「能登ならではの体験ができた」と体感できる空間あるいは時間をこれらの素材の組み合わせにより提供することが重要である。

次に、このような地域資源を活用し、能登地域内の各地でまちなか観光・体験滞在型観光をどのように深化させていくかという点について考察してみよう。ここでは先に述べた三つのポイントに従って具体策を組み立てる際の「切り口」を整理してみる。

①地域づくりへの地域全体による取り組み

能登各地の取り組みについて、それぞれをその地域全体のものにして活動のモチベーションを高め、これにより来訪者へのホスピタリティを向上させるための留意点を整理すると次のようになる。

- ・地域づくりのコンセプトは地域全体が共有できるものとなっているか
- ・活動の中核主体は、各地域主体に対して活動が地域全体の底上げになるということをきちんと説明しているか
- ・逆に各地域主体は、活動が交流人口の増加につながり、地域に活力をもたらすことを理解しているか
- ・地域全体（特に活動の中核主体やリーダー）がまちなか観光・体験滞在型観光に関するノウハウを高めているか（先進地のリーダー等から具体的な話を直接聞くなど）
- ・女性や高齢者にも活動の担い手として加わってもらうような工夫がなされているか（都市からの来訪者を地元の文化や料理などにより「もてなす」という点で役立つ）
- ・活動の持続性という点で、次世代の担い手を育成していくための工夫がなされているか、地元側が過度の負担を負わないような工夫がなされているか

②地域資源の観光資産化とその質の維持

次に、能登の地域資源を活用した観光資産の形成について考えてみる。まず、留意点を整理してみよう。

- ・地元ではありふれたものであっても、都市からの来訪者には魅力あると考えられる素材を見逃していないか（能登地域には素材が遍在）
- ・これら素材の組み合わせによって形作られた観光資産（ハード・ソフト双方を含む）は、来訪者がイメージしていた能登らしさ、能登ならではの体験を提供しているか
- ・観光資産は、各地を来訪して目が肥えている都市生活者等が満足できるレベルにあるか、またそれを維持しているか（本物・リアル感・旅情の提供、ストーリー性の付与、地域との適度な交流の提供、情報のワンストップサービスや十分なホスピタリティ）
- ・同様の観点で、外部の目線や特に女性・若者などの感覚を活かそうとしているか

また、先に見た素材を参考に、観光資産を形作る際の切り口として想起される一例を示したのが別表である。ここでは、「能登」のイメージを癒し・のどかさ・美しさ・なつかしさ・食材のおいしさ・文化伝統の奥深さなどとしている。

③効果的なプロモーション活動

能登地域の知名度向上・イメージアップにつながる能登を売り込むための積極的なプロモーション活動に加えて、まちなか観光・体験滞在型観光に関しては個人に直接地域情報を伝えるというパーソナル対応も重要である。その留意点を整理すると次のようになる。

こうしたプロモーション活動により能登の「お得意様」を増やし、彼らが口コミで能登をPRしてくれるようになれば、能登のブランド価値向上につながることとなる。

- ・能登に関心を持ってくれた人に、タイムリーかつ充実した情報を提供しようという意識が地域全体（特に活動の中核主体やリーダー）にあるか
- ・伝達する情報の内容はより具体的できめ細かなコンテンツとなっているか（季節ごとの景観スポット、旬の食材や料理、休憩どころ、地元の人でないと分からない裏情報など）
- ・民宿について、施設や料理の内容・料金の案内に加え、あるじの考えや宿側のこだわり、近隣での観光メニューなど、顔の見える情報が提供されているか
- ・伝達ツールや経路が重層的になっているか（ウェブ・ガイドブック・イベント・アンテナショップ・道の駅・携帯電話メールなど）
- ・ウェブサイトについては、様々な情報をワンストップで入手できる能登ポータルサイト、異なる地域の民宿同士が連携した案内サイトなどの工夫を意識しているか
- ・需要喚起型の直接的プロモーションを行っているか（eメールによるリピーター向け情報提供、通信販売業者や生協とのタイアップ、学校向け直接PRなど）

4. まとめ

まちなか観光・体験滞在型観光のポイントとして指摘した三つの事項は、決して目新しいものではないが、取り組みには不可欠のものである。能登各地の様々な活動を一過性のものに終わらせないためにも、三つのポイントの重要性について改めて理解が深まることが望まれる。これらのタイプの観光の取り組みを広げていくことは、地域づくり活動そのものである。これらは一部ハード整備を伴う場合もあるが、本質は地域の叡智の結集が求められるソフト事業である。その成就には多大な努力と時間を要する一方で即効性に乏しい面もあろう。しかしながら、このように形作られた「まち」や「むら」こそ地域住民自身の誇りであり、その「光を観に」訪れる人々にとっても魅力あふれるものになると言える。そして、こうした取り組みが中長期的には地域の自立的発展を促すものと考えられる。

【担当：田口 ^{たぐち} ^{まなぶ} 学 (e-mail:mataguc@dbj.go.jp)】

別表 まちなか観光・体験滞在型観光の観光資産を形作るための切り口（例示）

地域づくりの軸となるコンセプト（例示）	具体的取り組み（例示）
「歴史的景観や情緒ある風景を守ろう。」	<ul style="list-style-type: none"> ●地元産の黒い能登瓦や古い建築様式の建物、朝市などの生活風景を荒廃させることなく維持、まちの景観も統一。建物の歴史や由来についての説明を加えたマップ等を用意し、まちの雰囲気味わってもらおう。（まちなか観光）
「地域の文化、歴史を伝えよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ●渤海使との交流による伝承や地元の民話の語り部を置き関係する名所旧跡と組み合わせ、見るだけでなく聞くことによって体感を深めてもらう。（まちなか観光） ●キリコ祭りなど地元の祭りに住民と一緒に参加できる機会を提供。祭りの見物客としてだけでなく、地元住民宅に滞在してもらい地元との交流を重視。滞在中に地域の伝統文化や豊かな自然などをより深く体感してもらう。（体験滞在型観光）
「伝統工芸品になじんでもらおう。」	<ul style="list-style-type: none"> ●伝統工芸品の工房や販売店において、職人や専門家から本物の見分け方や品質の違いなどの詳しい解説をじっくり聞いてもらう機会を定期的に提供。伝統工芸品への理解と職人との交流を深めてもらう。製品についても、洗練された都市住民、女性、若者の志向に合うタイプのを企画開発する。（まちなか観光） ●伝統工芸品の製作に取り組んでみたい人向けに、職人の協力を得て基礎技術の習得機会を提供する。豊かな自然に囲まれた能登の地で日常を忘れ数日間製作に没頭できる時間を持ち、自作品を仕上げてもらおう。（体験滞在型観光）
「おいしく安全な食を提供しよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ●地物の魚介類・いしる・郷土料理など地元産にこだわり、味自慢とPRできる水準の「能登の食」を提供。フルコースでなく少量多種類楽しめるように、ワンコイン価格、食べ歩き可能な形態（屋台など）、食巡りのためのマップを用意するなど回遊を促すとともに、地元との交流が深まるような工夫を加える。（まちなか観光） ●地元の発酵食品・醸造品・酒など、生活に根付き安全な食品を土産として企画する。素朴な包装やロゴ、雰囲気あるディスプレイなど販売方法の工夫でも魅力を高め、買う楽しみの素材を提供する。（まちなか観光）
「自然との共生を図る地にしよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ●学校や児童を持つ家族層向けに、専門家や漁業関係者などの協力を得て、海辺の環境の学習や漁業体験の機会を提供する。環境に対する理解を深めてもらうとともに、魚の種類や調理体験などもしてもらう。（農業・林業等でも同様。）（体験滞在型観光）
「心身を癒す地にしよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ●健康志向にマッチした長期滞在型プログラムを用意する。女性や健康増進に関心が高い層をターゲットに、自然とのふれあい・温泉・地元の食材などによるヘルシーかつ高品位な心身リフレッシュメニューを提供する。（体験滞在型観光）

能登地域の観光振興に向けて

目次

はじめに	1
第1章 能登地域の現状整理	2
1. 能登地域の概要	2
2. 能登地域での観光産業の現状	3
(1) 重要な観光産業	
(2) 能登地域の観光動向	
(3) 交通アクセスの改善	
3. 能登地域で進む新たな取り組み	7
(1) 「輪風のふれあいに出会えるまち」づくり ～輪島市～	
(2) ハーブを活かしたまちづくり ～珠洲市～	
(3) 「春蘭の里」によるグリーン・ツーリズムの取り組み ～能都町～	
(4) 能登地域に関するPR活動	
(5) 自治体による誘客への取り組み	
4. 今後の発展に向け必要な視点	13
第2章 注目される「まちなか観光」・「体験滞在型観光」とそのポイント	14
1. 「まちなか観光」・「体験滞在型観光」による地域活性化事例	14
(1) 「まちなか観光」による地域活性化事例	
(2) 「体験滞在型観光」による地域活性化事例	
2. 「まちなか観光」・「体験滞在型観光」による地域活性化のポイント	20
3. 「まちなか観光」・「体験滞在型観光」のケーススタディ	22
(1) 岩手県遠野市 ～民話のふるさととしてのまちづくり～	
(2) 長野県飯田市 ～体験教育旅行・ワーキングホリデーの取り組み～	
(3) 長野県四賀村 ～滞在型市民農園（クラインガルテン）による地域交流～	
第3章 能登地域の観光振興について	35
1. 能登地域の資源の再整理	35
2. 能登地域の資源を活かしたまちなか観光・体験滞在型観光の切り口	39
おわりに	43
参考資料	45
参考資料1 最近の能登地域における観光振興・地域づくりの取り組み	46
参考資料2 豊富な能登地域の地域資源	50
参考文献	56